

# 会派視察・研修報告書

会派名 公明党  
代表者名 寺島 芳枝

1 日にち	令和 5 年 8 月 2 日(水) 10:00~17:00
2 視 察 先 研修名、主催者及び会場	(株)廣瀬行政研究所 京都経済センター(京都市下京区四条通室町東入函谷鉾町 78)
3 参 加 者	寺島 芳枝
4 調査・研修の テーマ	「ヤングケアラーへの支援と自治体の役割」
5 主な内容	<p>① ヤングケアラーの現状と必要な支援 伊藤嘉余子氏</p> <p>② 現場最前線～ヤングケアラー解決への手立て～ 辻由紀子氏</p> <p>③ ヤングケアラーの重層的課題解決とは？ 田崎由佳氏</p>
6 所感、提言事項、課題等	<p><b>【寺島芳枝】</b></p> <p>① ヤングケアラーの現状と必要な支援 大阪公立大学教授 伊藤嘉余子氏</p> <p>1、日本におけるヤングケアラーの現状 1980 年代イギリスで生まれた概念 2020 年日本で初めて調査 中学生 17 人に 1 人、高校生 24 人に 1 人、介護を担っている若者 15 歳～19 歳推計 37,000 人。ケアラーの家族構成ひとり親と子どもが 48.6%と最多。世話にかけている時間中学生 4 時間、高校生 3.8 時間。</p> <p>2、ヤングケアラーの支援ニーズと施策の現状 ヤングケアラーの問題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の時間がとれない。</li> <li>・睡眠が十分に取れない</li> <li>・友達関係にも影響が出る・相談できる相手がいない</li> <li>・美談にされると余計に相談しづらい</li> <li>・子どもとしての権利、人権が守られていない。</li> </ul> <p>全国各地の取り組み。埼玉県(2020) 全国初「ケアラー支援条例」「ケアラー月間」の創設…オレンジリボンと抱き合わせ。北海道栗山町(2010)「ケアラー手帳」。福岡市(2021)ヤングケアラー支援専用窓口設置。高崎市(2021)ヤングケアラーにヘルパー無料派遣。神戸市(2021)相談支援窓口、支援マニュアル策定など。</p> <p>3、ヤングケアラーへの支援や早期発見のポイント 国の支援策 *早期把握 *相談支援 *家事育児支援(保護者でなくても使えるように) *介護サービスの提供(子供による介護を前提にしない)</p>

支援のポイント(1) \*家族の世話をしている事を美談にしない\*家族のことを悪く言わない \*おとなのロールモデルとしての教員の役割(親と違う大人の関わり) \*自分や他人の経験えをむやみに持ちださない

要保護児童対策地域協議会 (子ども守る地域ネットワーク)努力義務化された。要対協の役割 連携や役割分担の調整の上、責任体制の明確化。

学校ができる支援 \*ヤングケアラー担当教員の配置\*安心して話せる環境づくり(SC ,SSW の全校配置)\*学びのサポートと、放課後の活動のサポート \*教育の権利、健康の権利、子どもらしく生きる権利

#### 4、ヤングケアラーの支援:国内や海外の先駆的な取り組みの紹介

支援先進国:イギリスの取り組み

- ① (介護者のための全国戦略)
- ② 所得補償 (ケアラー手当 )
- ③ 仕事と介護の両立(柔軟な働き方)
- ④ 要介護者へのサービスなど

#### ② 「子どもと家族に関する法律」「ケア法」2014年

現場最前線 ヤングケアラー解決への手立て 子ども家庭庁参与 社会福祉士 保育士 辻由紀子氏

ひとり親世帯 非課税世帯の基準

基準が低いので、生活や学費のためにこどもが働いたら世帯収入が増えて支援がなくなる。貧困から抜け出せない。

#### ③ ヤングケアラーの重曹的問題解決とは? NPO 法人やんちゃまファミリーwith 理事長田崎由佳氏

地域に元気な大人を増やし子育てしやすい社会を作る!!

地域の中で活躍する大人が増える仕組みづくり!

- 1、ささえる活動 \*子育てセンター \*一時預かり保育
- 2、きく活動 \*相談事業(LINE.電話) \*傾聴ボランティア訪問ほのぼの
- 3、つながる活動\*プレパーク、親子防災\*Yスタジオ\* Baboo プロジェクトいのちの授業 \*家事サポート応援 \*エプロン先生\*子ども食堂 実践する中で見えてきたこと 出せない SOS 出さない SOS SOS がわからない。

相手の顔が見える支援を実践している講師、現実の使えない制度や、寄り添った伴走型支援の重要性を痛感する、セミナーであった。多治見市において今後重曹的な支援体制を構築するにあたり、参考になるおおくの事を学ばせて頂きました。ふるいにかける市役所業務だけでは出来ない支援を地域住民の力や思いを借りて、個々の子ども達、若者の幸福を守るために、協働して取り組んでいくことは、多治見市の底力を蓄えていくことになると改めて思う。